

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 19 年度派遣報告書

——インドネシア共和国・Hasanuddin 大学、インドネシア語——
(H19.12.4 - H20.2.9)

平成 19 年入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程 1 回生
古川 文美子

自分の研究テーマについて

東南アジアの沿岸地域は、経済発展に伴い港湾開発等による埋め立てや森林伐採など、人間活動の影響が大きくなっている。現在、沿岸海域の環境破壊による生物多様性の低下が指摘され、水産資源に様々な影響が及ぶことが懸念されている。一方で、沿岸生態系の価値が見直され、長期的視野での保全や経済効果を目的としたマングローブ植林もはじまっている。しかし、その成果は主に植林技術の確立や植林本数で計られ、その後の生態系回復の程度は正確に把握されていないのが現状である。再生林域での光環境や土壌状態、波浪などの物理的環境はマングローブ植林後の遷移過程に従って変化する(松田, 1997)。この変化は、生物相にも影響を及ぼすことが予想される。故に、幼生期に高い拡散能力を持ち、成体期に移動能力の低いベントス生物群集を指標として把握することで沿岸生態系の回復状態をより正確に把握できるのではないかと考えている。現在、沿岸海域生態系の回復程度を有効に指標し得る生物群集に関する先行研究は少ない。そこで、私は植林活動の盛んなインドネシア、南スラウェシ州、シンジャイ県を調査地とし、マングローブの植林やその後の利用や管理のあり方によって、その沿岸周囲の生態系がどのような影響を受けていくのか、その変化過程をベントス生物群集を指標として用いる方法を確立したいと考えている。



研修語学の概要

インドネシア共和国は多民族国家である。民族ごとに独自の言語をもち、現在でもそれらが日常的に用いられているため、公用語としてインドネシア語が存在する。調査地、南スラウェシ州、シンジャイ県でもブギス語が日常的に話されているが、公式な場や報告書で用いられる言葉はインドネシア語である。公用語インドネシア語と各民族言語は、日本語の標準語と方言の感覚とは違い、それぞれが独立した言語文化として成立しているのである。今回はこの内、インドネシア語についての現地研修を受けた。

語学研修の内容

この研修の目的は、現地での情報収集及び文献や報告書を読み書きするのに不可欠な言語能力を身につけることにある。上記したように、主要な情報源となる文献や報告書はインドネシア語で書かれてい

る。つまり、フィールド調査をスムーズに開始するためには、インドネシア語を習得することが必須となる。調査を目前に控えた私にとって、この語学研修は願ってもない良い機会となった。研修期間は約2ヶ月間、一回の講義は90分、講義形式はマンツーマンで、インドネシア語学科の3人の先生方に交代で教えて頂いた。講義内容は主に文法中心である。それに加えて、前半は挨拶の仕方など、積極的に先生とコミュニケーションを取ることを重視した形式で進められた。講義はインドネシア語で行われるので、始めは先生が話している内容を既存の言語知識から推測するしかなかった。しかし、研修の中で24時間インドネシア語漬けの日々を過ごすうちに、先生が話している内容を直接理解できるようになってきた。この頃から、パソコンの語学ソフトを用いたリスニング練習も講義内容に加わり、後半には、聞き取ったインドネシアの習慣や民族、文化などの話題を簡潔に説明したり、そのトピックに関連する文章を書いたり、インドネシア語を使って表現することを重視した形式で進められた。

研修期間中に印象に残った体験や経験

ここまで読んで、この語学研修を堅苦しいものと感じた人がいるかも知れない。だが、実際の授業はそんなことはない。先生方は個性的で面白い。私の知らない単語があると、全身と小道具を使って表現してくれる。私が思い付くまで真剣に。手元にある辞書を引くと一発で分かるのだが、それを使うという選択肢を私は取れなかった。結局、授業中に辞書を引いたのは数回。その時、先生は心なしか寂しそうであった。そして、先生方は褒め上手。確かに、ここでは私は外国人。まだまだ、お客さん扱い。それにしても、褒める、褒める。問題ができると「バグース(よろしい)！」そして、うまく会話ができたら「ピンタール(かしこい)！」やはり、褒めてもらおうと嬉しいので積極的に先生達と会話したような気がする。豚もおだてりゃ木に登るである。この研修中に一生分くらい褒めてもらった。次に先生方に会う機会には、きつこう言うのではないだろうか、「カゲット(おどろいた)！」

目標の達成度や反省点について

インドネシア語で簡単な手紙や文章を書くことができの作成、また、話し相手の助けを借りつつも、自分の意思や要求を伝え、相手の話をある程度理解することができるようになった。実際、講義の合間にカウンターパートの先生を訪ね、先生にリードしてもらいながら、図や写真を使い、今後の研究計画について話し合い、アドバイスや調査地の情報を頂く事ができた。しかし、先生と研究内容について議論するにはまだまだ専門分野の語彙知識が不足している。

4月からのインドネシアでの調査開始は目前に迫っているが、今回の研修成果として、調査地に滞在し、必要な情報を収集する力はある程度身に付いたと思う。今後は、専門分野の語彙力を伸ばすことを視野に入れ、インドネシア語の勉強を続けたい。さらに、シンジャイ県に滞在する半年の間、調査地のことをより深く知るためにも、住民の母語であるブギス語も少しずつ習得していきたい。



インドネシア語の講義中

文学部長の先生と

カウンターパートの先生と